



TITLE:

[書評]Sylvian Agacinski : Volume,  
Philosophies et Politiques de  
l'Architecture Galilée,1992

AUTHOR(S):

石田, 靖夫

---

CITATION:

石田, 靖夫. [書評]Sylvian Agacinski : Volume, Philosophies et Politiques de l'Architecture Galilée,1992. 仏文研究 1993, 24: 145-147

ISSUE DATE:

1993-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137797>

RIGHT:

Sylvian Agacinski :  
*Volume, Philosophies et Politiques de l'Architecture*  
Galilée, 1992

石 田 靖 夫

以下に語ることはアガサンスキーの本を「序言」も含めて十三の論文ひとつずつの脈絡をつけながら全体の連関性の下に再構築することを前もって放棄している。それは、われわれの目下の問題設定に直接関わるテーマだけをこの本の中から取り出し強調するかぎりにおいて意図的に偏狭な書評になるだろう。

国家、社会あるいは共同体について語るとき、ある誘惑が思考を待ちうけている。たとえば、ヴァレリー。「人間社会を一種の作品にすること」、「独裁者の内には芸術家がいる、そして彼の構想には美学的なものがある」、「[……]もし独裁が設置されれば、[……]ある人物の様式—文体 *style* が統治のあらゆる行為に刻まれることになるだろう [……]」。たとえば、橋川文三。「事実、《芸術品としての国家》という言葉は、まるで明治国家のために作られたようなものではなかったか。それは、近代日本の全体のエネルギーが創造した唯一の美学的造形であったのではないか。」

ここには政治と芸術を同一視する思考様式が共通に働いている。誘惑と言ったのはこのような思考様式を指してのことであるが、それではこの誘惑はいったいどこから来るのだろうか。言いかえれば、このような思考様式はどのような暗黙の前提に基づいているのだろうか。この問いを導きの糸にすることによって直ちにアガサンスキーの著書に接近しようと思う。

アガサンスキーの利害=関心は、一言で言えば、建築の思考を改めて問い直しその可能性の条件を探ることにある。それはまず、ギリシア以来の形而上学的思考に対する批判的見直しの作業を意味する。事態は、建築家自身がそのメチエを自立的に理論化する前、すでに、倒錯した形で起きているのだ。「形而上学は現実なるものを合理的に制御するという己の夢を建造術 *art de bâtir* に対して投影した」(p. 21) のである。「合理的なものと構築されたものとの間の等価性」(p. 21) を設定した哲学によって、「生産すべき事物の本質認識の上に全権威の基礎を置く構築家という形而上学的観念が鍛えあげられた [= でっちあげられた]」(p. 22) わけだ。アリストテレス哲学においてはこの「事物の本質」は「始まり」—「原理」を意味する *archè* であり「終極目的」を意味する *télos* でもある (p. 39)。アリストテレスにとって、*archè-télos* を理論的知として構成できる「構築家」こそ「支配」する者に他ならない。なぜなら、*archè* は、まさしく「支配」という意味をも持っているからである。このような事態を集約する語が *archi-ecte* (あるいは *archi-ecture*) である (p. 38)。「建築家」とは *archè-télos* の理論的認識者として *tektonikos* (「大工」あるいは「職人」(p. 38, p. 39)) の「支配者」なのである。アガサンスキーがとりわけアリストテレスに立ち帰り、*archi-ecte* のギリシア語にこだわるのは、現代史の戦慄的な過去を見据えているからである。すなわち、「その数多くのイデオロギー的言説において政治と芸術を、僧主と建築家を同一化した国家社会主義という形式をとった全体主義」(p. 12) 国家ドイツである。「第三帝国は〈ボリス的=政治的〉組織として、こう言ってよければ、偉大な芸術作品であって、総統はその芸術家ならびに作者である」(p. 204)。しかしながら、アガサンスキーは国家社会主義の先駆がアリストテレス哲学にあると言いたいのではない (cf. p. 38, pp. 52-53, p. 55)。形而上学によってまさしくすでに回収されてしまった建築の思考を改めて検討するためにギリシア哲学にまで遡及するわけである。アガサ

ンスキーが「まず建築を哲学から——すなわち、建築に己の概念をあまりに課してきたにすぎない形而上学から——守らなければならない」(p. 19)と主張する理由もここにある。そこでたとえば、アガサンスキーは archè-télos 認識のアリストテレスの特権化に、特にこの場合、数学をモデルにしたプラトンにおける発案 eurésis 概念 (p. 22) に由来し偶然性の排除を前提にする「合理的発案 invention rationnelle」(p. 23) と、偶然性を「出来事」として本質的契機のうちに取り込む「経験的発案」(p. 23) とを対置し後者の復権を唱える——前者を全く切り落とすという意味ではない——ことによって建築の思考を問い直しているが、それは、前者の必然的帰結であるだけでなく「芸術作品」としての第三帝国建設というナチス神話を支えてもいた「作品」概念、「秩序づけられ首尾一貫した全体性 totalité としての作品」(p. 22) 概念を批判するためである。

「『建築家を欲する社会に災いあれ』と言わねばならないのだろうか。その通りである、もしも、ある共同体が客観的に自分の殻に閉じ籠もろうとし、全体化する作品のうちに自己との差異、多様性、複合性、多数を廃棄しようとする欲望のことをそれが意味するのであれば。」(p. 126) アガサンスキーはこの引用文の後半の留保からもわかるように、建築も含めての芸術一般に「全体主義的本質」(p. 126) があるなどと主張しているわけでは勿論なく、上で規定されたような形而上学的建築(家)像を前提にした芸術と政治とのナチスの同一化そのものをあくまで問題にしているのである (p. 127)。しかしそのとき、「共同体=芸術作品」という思考の隠喩性を無邪気に問うてはならない。なぜなら、métaphore の語源的意味が「運ぶ・移す」であるときに、問題は政治と芸術の間、権力者と建築家の間にのみあるかと言えばすでにそうではないからである。共同体=芸術作品という隠喩を媒介する語 archi-ectect / architecture そのものがすでに形而上学的の隠喩であり、このことを無視して芸術と政治のどちらが他方の隠喩であるのかを問うのは、自立した建築の思考が手がけるよりもはるかに先んじて archi-ectect / architecture の概念を規定した形而上学、「起源、始まりの優先性と支配の優位性という二つの優位性の結び目を archè という名の下に発案する [=でっちあげる] 位階化の思考 pensée hiérarchisante の湧出としての形而上学」(p. 44) そのものを単に反復するだけのことだからである。したがって、建築の思考を解き放つ試みは共同体の思考を解き放つ試みであるだけでなく、さらには思考そのものの(不)可能性の追求でもある。

「建造されたものと共同体とを非=アルケー[アナーキー]的な an-archique 仕方でも思考することの可能性あるいは不可能性こそむしろ問わなくてはならないことだろう」(p. 46) という要請は極めてスリリングな方向へと思考を定位する。共同体を芸術作品として「構築」しようとするナチスの逆説は、「構築に用途が欠落している」(p. 206) という点、そこでの「構築が、散り散りで多様であった人々を一つの民族[自己同一性原理である Volk のこと]として統一すること以外には何の役にも立たない」(p. 206) という点にある。あたかも、構築されるのが建物の物質性ではないかのように。アガサンスキーはこの逆説の途方もなさのことを、「大衆の国民化 nationalisation des masses に貢献できる作品神話の権力」(p. 206) と呼んでいるが、ナチスの出現とその展開はこの「作品神話の権力」に「精神主義的、主意主義的そして主観主義的思考」(p. 59) を連結した政治と芸術との同一化を通して archi-ectect / architecture という形而上学的暴力の隠喩が暴力そのものの隠喩へと変容していった過程であると言ってよいだろう。共同体 communauté が自己同一性を賭けて「共同的なもの le commun と本来的なもの le propre との間の古典的な共犯性」(p. 143) に手を染めるとき、「自己との純粋な空間から出発して本来的なもの、あるいは本来性を肯定する」(p. 143) だけでなく「私的なものと共同的なものとのが、外部および他者性との間で、のっけから維持している関係を覆い隠す」(p. 143) とき、そのような欺瞞的思考様式の投影性を徹底的に暴露してやらねばなるまい。そこにこそ、アガサンスキーの言う「非=アルケー[アナーキー]的な」思考の可能性が賭けられているのだ。

以上のことに関連してアガサンスキーが本書の中で極めて特異な視点から論じているテーマを取り上げねばならなかったのであるが、割当られた紙幅も尽きようとしているので割愛することにする。共同

体の思考を自己同一性の純粹性のうちに塗り込めないために、さらに、テキスト概念——それが均質であることを望むのはまさしく形容矛盾である——が作品概念に突きつけている緊張関係を宥和することなく前者の戦略的思考を絶えず批判的に練り上げるためにも、アガサンスキーが問おうとしている建築の思考の解放、「非＝アルケー [アナーキー] 的な」思考の（不）可能性の追求に刻印されている、優れて政治学的視点の逆説性を決して忘れてはならないと、最後に言っておきたい。